8. 高知医療センター・高知県立大学包括的連携事業：看護・社会福祉連携事業

1) 看護・社会福祉連携事業について

高知医療センターと高知県立大学は、医療・健康・福祉・栄養分野における交流連携を推進し、双方の実践、教育、研究の質向上を図るとともに、地域・社会への貢献を促進するため、平成 22 年 11 月に両組織間の包括的連携協定を締結した。これは、高知医療センター看護局と本学看護学部が、よりよい看護の実現を目指して平成 18 年から取り組んできた看護連携型ユニフィケーション事業を発展させたものである。現在はこの協定に基づき、全体を統括する包括的連携協議会の下に、健康長寿・地域医療連携部会、看護・社会福祉連携部会、健康栄養連携部会、災害対策連携部会の 4 部会を設置し、さまざまな連携事業を展開している。

このうち看護・社会福祉連携部会では、看護および社会福祉に関する連携事業として、①学生の臨地実習・教員の臨床研修における場の提供、②基礎教育・継続教育・大学院教育における相互協力、③教員によるコンサルテーションの実施、④臨床実践能力（知識・技術・態度）及び実践モデル等の開発・検証に関する共同研究、⑤県民・市民の健康づくりに資する活動の共同開催、⑥その他看護・社会福祉連携活動の実施、を行っている。

(1) 看護・社会福祉連携部会の委員および活動状況

令和 5 年度は部会委員を、高知医療センター20 名（看護局 8 名、地域連携室 12 名）、高知県立大学 10 名（看護学部 7 名、社会福祉学部 3 名）、計 30 名で構成し、活動を推進した。今年度は高知医療センター看護局が部会長および事務局を務めた。

看護・社会福祉連携部会では、前年度末に活動計画が決定していたため、下記のとおり 1 回のメール会議と 1 回の部会会議を開催した。また適宜、情報交換や相談を行いながら、事業を進めた。

・第 1 回看護・社会福祉連携部会（メール会議）：9 月
　上半期の事業実績および下半期の事業計画の確認、COVID-19 による影響の把握
・第 2 回看護・社会福祉連携部会：2 月 19 日開催
　事業実績および活動評価の確認、次年度の活動に向けた課題の検討、次年度の事業計画の検討等

(2) 看護部会における事業実績

今年度は、活動に対する COVID-19 の直接的影響は概ねなくなったが、一部はオンラインで行うなど工夫し、両施設で協力して事業に取り組んだ。最終的な事業実績は表 1 のとおりである。

表 1　令和 5 年度看護部会における包括的連携事業実績

1. 学生の臨地実習・教員の臨床研修における場の提供
1) 学部生および大学院生の臨地実習
学部生：看護基盤実習、★看護実践能力開発実習Ⅰ、急性期看護実習、慢性期看護実習、母性看護実習、小児看護実習、総合看護実習（急性期看護・慢性期看護・小児看護・助産看護領域）、看護管理実習（急性期看護・慢性期看護・小児看護領域）、助産看護実習Ⅰ・Ⅱ　のべ 288 名
大学院生：小児看護学実践演習Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ、がん看護学実践演習Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ、家族看護学実践演習Ⅰ・Ⅱ　のべ 12 名
2)大学院生および教員の臨床研修

大学院生：緩和ケアカンファレンス・キャンサーボードへの参加（がん看護学領域、3 回・のべ 3 名）
＊参加者なし：小児科医開催のカンファレンスへの参加（小児看護学領域）
教員：小児科医開催のカンファレンスへの参加（小児看護学領域 1 回・のべ 1 名）、★学部教育・高度実践看護師教育課程における教育力向上のための実践活動（コンサルテーション、教育）（精神看護学領域、1 名）
＊参加者なし：緩和ケアカンファレンス・キャンサーボードへの参加（がん看護学領域）、急性期領域のセミナー等への参加（急性期看護学領域）

2. 基礎教育・継続教育・大学院教育における相互協力

1)医療センターによる教育・研究支援

(1)教育支援

学部生：ドクターヘリ見学および「ドクターヘリの運用とフライトナースの役割について」（4 回生 2 名）、インターンシップ（3 回生 64 名）
実践的知識獲得へのサポート；「感染管理について」（2 回生 88 名、3 回生 85 名）
ゲストスピーカー；急性期看護論「クリティカルケアの場における死と看取り」（2 回生 79 名）、終末期看護援助論「終末期にある患者と家族のケアの実際」（3 回生 83 名）
母性・助産看護領域助産師の派遣 1 名（4 月～9 月）
★看護実践能力開発実習における指導（4 回・4 回生 79 名）
＊参加者なし：ナーシングカフェ
＊未開講：がん看護論ゲストスピーカー「外来でがん治療を受けるがん患者への看護支援」、実践的知識獲得へのサポート「医学的知識を活用した看護実践」、小児看護の魅力を語る会（2、3 回生対象）
大学院生：在宅看護展開論Ⅱ特別講義「褥瘡処置が必要な在宅療養者とその家族へのケア」「瘻孔処置が必要な在宅療養者とその家族へのケア」（博士前期課程 1 名）

(2)研究支援

学部生：看護研究における研究対象者の紹介（4 題）
大学院生：修士論文、博士論文における研究対象者の紹介（8 題）
教員：教員の研究における研究対象者の紹介（1 題）

2)大学による教育・研究支援

(1)継続教育支援

研修の講師：「ストレスマネジメント」（41 名）、「グループマネジメント」（15 名）、★「4・5 年目看護師のキャリア開発」（22 名）、★「話をきく技術」（10 名）
実地指導者リーダーフォローアップ研修への教員の参加（2 回・各 10 名）
シミュレーション研修「けいれんの初期対応」のトレーニングならびに勉強会；4A フロア（小児看護学領域、3 回・25 名うち医療センター13 名）
マネジメントリフレクション（看護管理学領域、3 回・38 名）
シミュレーション教育学習会（オンラインでの学習会）「教育実践に活用する振り返りの技」（22 名うち医療センター5 名）
★災害看護 3 研修における机上シミュレーション物品の貸し出し

(2)研究支援

看護研究 4「看護研究を系統的に学ぶ」（3 名）
＊未実施：「産後 2 週間健診結果に基づく産後ケアの見直し（仮）」

3. 教員によるコンサルテーションの実施

CNS 申請に向けてのサポート（慢性看護学領域１名） CNS 認定更新に向けてのサポート（がん看護学領域１名） ＊未開催 : QC サークル活動のコンサルテーション、シミュレーションを活用した病棟の学習会の内容を今後の実践・災害看護につなげる方法の検討 ; 4B フロア、せん妄・認知症ケアリンクナースが認知症ケアの質の向上と実践を広げていく役割を遂行するためのコンサルテーション
4. 臨床実践能力（知識・技術・態度）及び実践モデル等の開発・検証に関する共同研究 なし
5. 県民・市民の健康づくりに資する活動の共同開催 1)市民を対象とする共同事業 ＊未開催 :「赤ちゃん同窓会」企画・運営への学生・教員の参加 2)専門職者を対象とする共同事業 なし
6. その他看護・社会福祉連携活動 なし

★は新規事業

(3) 事業評価および次年度への課題

看護小部会では、今年度も両施設で連携しながら各事業を実施した。COVID-19 の影響で中止した事業（「赤ちゃん同窓会」）や参加の調整がつかず見送った事業（大学院生・教員の臨床研修の一部）、他の事業が代替したため開催しなかった事業（せん妄・認知症ケアリンクナースに対する教員によるコンサルテーション）などがあるが、計画していた事業は概ね予定通り実施できた。

年度末には部会会議において事業評価を行い、ここ数年の状況を踏まえ、これまで実施してきたいくつかの事業を今年度で終了したり、対象を変更したりすることになった。今年度、新カリキュラムに対応した実習（看護基盤実習、看護実践能力開発実習Ⅰ）がスタートしたが、高知医療センターの協力を得て、学びの多い実習となっており、引き続き次年度以降も連携して実施する。大学側からは次年度の新規事業として、4 回生の総合看護実習の精神看護領域、3 回生のチーム医療実習を依頼し、開始されることとなっている。一方で、今年度新規事業であった看護実践能力開発実習における指導は、講師との事前打ち合わせの日程に余裕がなく、講師への依頼内容の明確化と目標の焦点化に課題があったため、次年度は講師への依頼、事前打ち合わせの時期を早めに開始することになった。これまでの事業を継続するだけでなく、各事業の効果や必要性を評価し、改善や発展に取り組むことができており、両施設にとって有機的な連携事業を生み出すことができている。

また、看護と社会福祉の連携強化として実施してきた、社会福祉小部会で毎月（4～10 月）行われている事例検討会は、今年度は対面とオンラインのハイブリッドでの開催であり、医療センター側は SW のみの参加となったことが課題として挙がったが、本学からは看護の教員や大学院生も参加することができた。大学院生にとっては社会福祉やソーシャルワークについて学びを深める機会や、各専門領域における社会的課題に関して多角的に考察する機会となっている。また、社会福祉と看護の視点を織り交ぜ、対象者理解や関わりのプロセスを振り返ることで、複眼的な分析につながるだけでなく、互いの専門領域の考え方や活動を知ることが参加者にとって刺激になっていることから、今後も引き続き参加を促していきたい。

2) 高知医療センター・高知県立大学スキルズラボ

(1) 高知医療センター・高知県立大学スキルズラボの相互利用の概要

高知医療センター2 階 205 に高知医療センタースキルズラボが開設されている。本学からは、医療センター看護局を通じて高知医療センターのイントラネット（院内 Web→設備予約）を使用して事前予約をおこなってから使用する（鍵は看護局、事務局で管理）ことになっており、主に学部生実習などの目的で使用している。高知医療センターの医師や看護師も事前予約の上、本学に設置している設備および備品（シミュレータなど）を使用できる。申込書類は教育研究戦略課に提出されるため、設備および備品の管理責任者は総務企画課から連絡があった場合、設置室、設備および備品を確保する。

⑵ 高知医療センタースキルズラボの利用実績

令和 5 年度（9 月末現在）における高知医療センタースキルズラボ使用実績として使用人数は備品使用 725 件、部屋使用人数 143 名であった。昨年度より増加が見られる。コロナ禍が弱まった結果であろう。令和 5 年度（9 月末現在）におけるナーシングスキルへのアクセス数は 341 人、アクセス回数は 10,197 回、映像閲覧回数は 1,624 回、閲覧コンテンツ数は 875 であった。動画講義へのアクセス数は 88 人、アクセス回数は 478 回、閲覧講義回数は 188 回、閲覧講義数は 91 であった。本学からの高知医療センタースキルズラボ使用実績はなかった。ナーシングスキルコンテンツへのアクセスや講義閲覧実績はなかった。

⑶ 高知県立大学スキルズラボの利用実績

備品の使用実績はなかったが、本年度の高知医療センターによる本学施設の利用実績として、高知医療センター・高知県立大学包括的連携事業「医療コンフリクトマネジメント研修会」が 12 月 16 日（土）に開催された。BLSO プロバイダーコースが本学施設を使用して、令和 6 年 3 月 16 日（土）に開催された。

⑷ 高知医療センター・高知県立大学スキルズラボ運営委員会

本学からの委員として、池田教授が参加している。本年度は令和 5 年 10 月 25 日（水）に第 1 回スキルズラボ運営委員会が開催された。令和 5 年度スキルズラボ備品等決算、令和 5 年度使用実績等報告、令和 6 年度スキルズラボ予算について話し合われた。運営委員会での議論は、高知医療センターとの包括的連携協議会において報告された。

⑸ 次年度の課題

本年度は昨年度に比べて、使用実績や活動実績がやや改善した。しかし、本学からのスキルズラボ使用実績は依然少なかった。コロナ禍の影響が残るなか、医療センター職員、学生（学部・大学院）や教員の相互乗り入れが徐々に再開されてきた。両機関の積極的な相互利用が望まれる。

⑹ スキルズラボ備品

本年度のスキルズラボの備品は昨年度と同様であるので、ここでは再掲しない。

3）病院前妊産婦救護に関するシミュレーションコース　Blso in 高知

⑴ 事業概要

本事業は、高知県内の救急隊員や医師、看護師を対象とし、病院外や救急外来での急な分娩の対応、産科救急の初期対応を学ぶ研修である。高知県が平成 29 年度から高知医療センターに委託している事業であり、4 年ぶりに本学を会場として令和 6 年 3 月 16 日に開催された。看護学部教員（母性・助産看護学領域）は運営サポートに携わった。研修プログラムは、分娩介助、新生児蘇

生、女性傷病者の評価、症例検討、救急車内分娩などであり、講義と少人数グループによる実技トレーニングにより実践を学ぶ内容となっている。

⑵ 活動成果

高知県内の分娩施設の減少により、住居区域外で妊婦健診・分娩をする妊婦は多数いる。そのため、分娩施設までの物理的距離から、分娩施設がない地域の医療者は車中分娩、妊産婦救急に遭遇する機会が増えているといわれている。周産期専門でない医療従事者がそのような場面での対応を学ぶことは、高知県内の妊産婦や胎児・新生児の救命に直結することであり、高知県民が受ける医療の質向上につながる。

⑶ 活動評価

研修は本学助産コースの 4 回生もアシスタントに入り傷病者役割をとるなどチームの一員として参加した。卒業・就職を目前に実践的な知識や技術を確認し専門職としての意識を高める機会になった。